

高等教育から始めるメディア学習の課題

匹田 篤[†]、長登 康、稲垣知宏、隅谷孝洋、中村 純

[†] 広島大学大学情報サービス室、 広島大学情報メディア教育研究センター

hikita@hiroshima-u.ac.jp, nagato@riise.hiroshima-u.ac.jp,

inagaki@hiroshima-u.ac.jp, sumi@riise.hiroshima-u.ac.jp,

nakamura@riise.hiroshima-u.ac.jp

高等学校での情報教育が必修になり、小中学校でも情報教育が始まっている。一方社会における情報メディアの活用シーンの多様化、高度化はますます進んでおり、それとともに、高等教育の現場において情報教育、特にメディアの特性を理解し、それを活用する能力を習得する機会の重要性は高まってきている。

このような背景の下、広島大学では本学構成員を対象に、平成15年度前期にオープンクラス「メディア活用研究」と題した講義を試行した。

本論では、この取組みを紹介すると共に、試行で得られた課題について述べる。

1. はじめに

広島大学では、平成9年に情報教育研究センター（現：情報メディア教育研究センター）を設立し、情報科学の理論的な展開、大学の各分野における情報活用の現状、情報システムの基本操作を柱とした情報リテラシー教育を開始した。また平成13年には多目的自主学习支援環境としてマルチメディアフロアを解説するなど、情報メディアの学習環境の整備も行ってきている。

そのようななかで、コンピュータの理論や活用方法を学ぶ情報教育だけではなく、情報メディアをより効果的に活用する実践的なカリキュラムの必要性が高まってきた。

これまで、情報メディアの効果的な活用は、特定アプリケーションの習熟という形で行われることが多かった。そのためどうしてもパソコン教室のような形態になりがちであり、一部のユーザを対象としたものになってしまうことが多かった。この形態は、特定ユーザの能力向上という効果は期待できるが、構成員全体としてのメディア活用能力の向上という点では、あまり効果が期待できるものではない。

メディア教育は、専門教育としてではなく、教養科目として広く提供されるべきである。そこで、今回試行した「メディア活用研究」では、アプリケーションの習熟ではなく、あくまでメディアの特性を理解し、活用する能力を身につけることに注目した。

その過程において、デジタルカメラを用いたり、文章を作成するといった作業だけではなく、場合によってはコンピュータを用いた画像の加工や動画編集のような、比較的高度な作業が必要となるのであるが、それらについては必要に応じてそれを教育していくことで対応し、メディアの特性の理解と活用能力の向上という狙いから大きく外れないように努めた。

本論では、まずカリキュラムの概要を紹介し、高等教育におけるメディア学習のあり方について議論をしていく。

2. カリキュラムの概要

大学生がなぜメディアを学ぶ必要があるのか。メディアを学ばないとこれからの社会では通用しない、といった脅迫的な理由ではなく、メディアの特性を学ぶことで、社会の成り立ちをより深く理解し、創造的な活動へつなげていくために学ぶというべきである。

そのため、小中学校や高等学校における教科教育と比較すると、高等教育ではより実践的なメディアの活用に関心が向けられると考えられる。

今回は試行期間の関係で12回の講義となったが、以下のとおりポスター、報道、CMという大きく3つの課題を持つカリキュラムとした。

第1回：講義のガイダンス

- ・講義の進め方とスタッフの紹介
- ・なぜメディアを学ぶのかの説明

第2回～第4回：ポスターを創る

- ・既成の広告ポスターについての考察
- ・グループ実習（受験生獲得ポスター制作）
- ・[機材] デジタルカメラ、カラープリンター
- ・[アプリケーション] illustrator 10、photoshop 7

第5回～第7回：報道について考える

- ・戦争報道についての考察
- ・実習（ラジオの1分間原稿を作成する）

第8回～第12回：CMを創る

- ・TVCM、映像作品の考察
- ・グループ実習（大学のイメージビデオ制作）
- ・[機材] ビデオカメラ
- ・[アプリケーション] iMovie3

これらのカリキュラムを決める際の考慮点は以下の通りである。

- ・理論と実践を交互におこなう形式
理論を提示し、その後に自らが手を動かして作品を創る機会を与えることを念頭に置いた。
- ・知識の即効性と創作意欲
講義で得た知識を、日常で活用できるような内容とした。カリキュラムの受講後も創作活動を継続することを目標とした。
- ・チーム作業の体験
一つの課題について4、5人程度のチームに分かれて作業をおこなった。チーム内における意見集約や役割分担の明確化といった共同作業における重要性の学習をねらった。

3. 高等教育における問題点

3.1 基礎知識のばらつき

メディアの特性について、体系的な教育が施されていないため、受講生の興味の度合いによって、基礎知識に大きなばらつきが見られた。これについてはカリキュラムを、ステップに分けたものとする事で解決するだろう。

3.2 教材の問題

メディアの学習をするにあたり、TVのニュース番組などを用いて学習カリキュラムを組み立てることは、教える側にとってかなりの能力を要求される。今回は一部のスキニングテレビジョン日本版を用いたが、これは大変使いやすい教材であった。受講生からも日本のメディア文化との違いを指摘する声が多く、またこういった教材の数が少ないこともあり、国内メディアを取り扱った同様の教材が数多く出てくるのが、強く期待される。

3.3 著作物の使用や加工の問題

特に報道については、録画したニュース番組を再編集し編集の効果を学ぶ、といったことをしようとする、著作権の教育の特例により教員個人のみが編集をおこなうことが許されている。演習など教員の指導の下、受講生に編集をさせるようなことができることが望ましい。

3.4 多人数対応の問題

今回の受講生は総数で28名であった。それを5人のスタッフで担当したが、アプリケーションの説明や撮影の際のアドバイスなど、スタッフ一人が対応できる受講生は5名が限度であると感じた。メディア活用の講義は、教養科目として広く提供されるべきであるが、この講義形態での限界もある。スタッフを育てていくとともに、より効率的な講義形態を検討していく必要がある。

4. まとめ

今回は試行のためオープンクラスとした。学生のみならず教職員の能力向上を鑑み、教職員にも受講を呼びかけたところ、20名の定員に対してわずか二日間で多数の申込みがあり、学生：教員：職員の割合はほぼ1：1：1、総数28名が受講してくれた。教職員の割合の多さは計算違いであったが、グループ実習においては、経験や年齢を超えた意見交換が実現できたことには、大きな意義があったといえよう。

今回のカリキュラムがアプリケーションの習熟を目的としたものではないことについては、一定の理解が得られた。習熟以前に特性を生かすことの理解が進んだものと思われる。

今後は、身近なTVメディアをより積極的に取り上げ、メディアの影響力について不快議論が提供できるようなカリキュラムを作成していくことが、効果的なメディア教育へとつながっていくことと考える。こういったメディアを批判的に読み解くことを、どう創造的な活動に結びつけるかが、カリキュラム編成の鍵となる。

今後はより多くの人数に対応できるように、またより質の高いメディア教育が提供できるように、カリキュラムの検討を進めていく必要がある。

参考文献

- [1] 稲垣知宏、隅谷孝洋、永井克彦、長登康、中村純：大学の情報リテラシー教育の再検討、情報処理教育研究集会講演論文集、146-149(2002)
- [2] 稲垣知宏、長登康、隅谷孝洋、入江治行、中村純、永井克彦：教養から専門へ、情報教育の将来像、情報処理教育研究集会講演論文集、(2003)